

〈論文〉

構造的支配－権力パラダイムによる 「共有された人間特性」論の統合 (3)

——Michael Maccoby の「社会的人格特性」¹⁾理論の意義——

坂 本 雅 則

キーワード

社会的人格特性
批判的实在論
社会的存在論
新フロイト派
Erich Fromm
Michael Maccoby
生産様式
再生産様式

目 次

はじめに

1. 再説：構造的支配－権力パラダイムの包括性と統合性

- 1.1. 批判的实在論における社会存在論の意義
 - 1.1.1. 「実在的領域」の設定と TMSA モデル
 - 1.1.2. 「社会構造」の因果的作用形態の重要性
 - 1.1.3. 説明力における優位性
- 1.2. 統合パラダイム（構造的支配－権力パラダイム）の提示

- 1) 前稿までとは日本語表現を変更した。前稿までは social character を直訳的に「社会的性格」としていたが、Fromm と Maccoby らの理論内容を考えると、物的環境と社会的環境との相互作用を通じて、Character のいくつかの塊として一定の傾向 (Character Orientations) を持ち、それらいくつかの塊の全体が人格を形成すると考えられている。したがって、日本語として訳すと、「社会的な相互作用を通じて形成される人格を構成する人間特性」の経時的形成と進化が理論的枠組の軸となっていることから、「社会的性格」理論よりも「社会的人格特性」理論と表現することにした。

- 1.2.1. 片岡「生産関係」説の射程と残された課題
- 1.2.2. 批判的实在論の適用意義：生産関係の動態の形態変動の把握
- 1.2.3. 構造的支配－権力パラダイムの包括性と統合性

2. *The Gamesman* (1976), *The Leader* (1981) における「共有された人間特性」論の意義

- 2.1. Maccoby の研究方法の背景
- 2.2. アメリカ巨大企業における構造的支配形態の変動様式
 - 2.2.1. 具体的研究対象；管理職へのインタビューとタイプ化

【以上まで第 61 巻第 1 号】

- 2.2.2. 「選択圧力」で変遷する優勢を持つ人間特性
- 2.2.3. *Creative Gamesman* の理論的意義
- 2.3. 新フロイト派；Fromm の理論的枠組からの継承点

2.3.1. 社会存在論としての人間主体の位置づけ

【以上まで第 61 巻第 3 号】

- 2.3.2. 社会存在論としての社会構造の位置づけ
- 2.3.3. 社会存在論の企業レベルへの適用
- 2.3.4. 理論的枠組の適用事例；メキシコ農村の変容過程
- 2.3.5. 小括；Maccoby との接点

【以上まで本号】

- 2.4. Maccoby による適用拡大
- 2.5. Maccoby の新奇性
- 3. *Why Work* (1988) における「共有された人間特性」論の意義

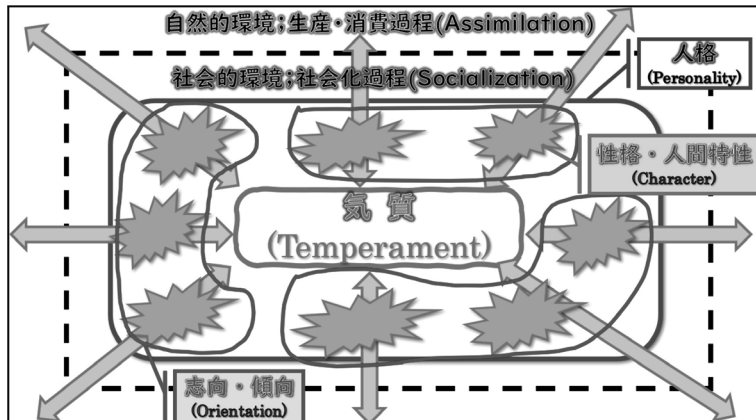


図1 新フロイト派の社会存在論における人間主体³⁾

- 3.1. 新しい「共有された人間特性」の出現
4. 2000年以後の著作のインプリケーション
 - 4.1. *Narcissistic Leaders* (2007)
 - 4.2. *The Leaders We Need* (2007)
 - 4.3. *Strategic Intelligence* (2015)
5. 「社会的人格特性」理論の限界点と構造的支配
－権力パラダイムによる統合

2.3.2 社会存在論としての社会構造の位置付け

ここからは、新フロイト派の社会存在論において、社会構造がどのような位置付けとなっているのかを議論したい。前稿まで²⁾で指摘したとおり、社会的人格特性理論の構築者はFrommであり、社会構造に関する議論は、*Escape from Freedom*の方で中心に行っているため、そちらを中心に説明をしていきたい。

上図は、前稿において、社会的人格特性理論では人間主体をどのように概念規定しているのかを筆者なりの解釈で作成した図である。

社会構造部分というのは、緑の両矢印の外側にある社会関係（四角の空白の枠）のことであり、社会的人格特性理論では「生産・消費過程」とそれを生み出すための「社会化過程」と表現されている。

ある特定の経済システムによって規定されているという意味での生活様式が、個人にとっては、その人が持つ人間特性の構造全体を決定する第一義的要素である。なぜなら、自己保存という必須条件こそが個々人にその人が生きていく上での条件を受け入れさせるからである。このことは、個々人が既存の経済的政治的变化を仲間と協働して引き起こすことができないというわけではなく、ただ単に個々人の人間特性の偏りは生まれ落ちる特定の生活様式によって形作られるということである⁴⁾。

- 2) 坂本雅則 (2022a), 「構造的支配－権力パラダイムによる「共有された人間特性」論の統合 (1)」『龍谷大学経営学論集』第61巻第1号, 坂本雅則 (2022b), 「構造的支配－権力パラダイムによる「共有された人間特性」論の統合 (2)」『龍谷大学経営学論集』第61巻第3号を参照して欲しい。
- 3) 坂本雅則 (2022b), 「構造的支配－権力パラダイムによる「共有された人間特性」論の統合 (2)」『龍谷大学経営学論集』第61巻第3号, 13頁から引用。

経時的な側面を前提に考えたとき、人間存在は真空状態に生まれるのではなく、支配的な、ある特定の経済システムの生活様式（生産様式）の中で生まれるのであり、それを第一義的な条件として受け入れながら、自らの再生産を追求

4) Fromm, E. (1994). *Escape from Freedom*. Holt Paperbacks. p.16. から引用。

する。

批判的実在論における社会的存在論を基礎にした構造的支配－権力パラダイムの観点でいえば、社会構造が時間的に先行しており、それを条件として制限もされていると考えている点は類似性がある。ただ、社会的人格特性理論では、人間主体が先行条件としての社会構造を活用して力を発揮するための「物質因」として作用するとまでは考えられてない。

この部分だけを見れば、構造決定論的な枠組みであるようにみえるが、次の引用文を見れば、CR という社会存在論における、社会構造の人間主体を通じた形態変動プロセスと類似した枠組が念頭に置かれていることがわかる。

経済的社会的変化によって生み出され、宗教的教義によって強化された新しい人間特性の構造が、今度はその経済的社会的のさらなる発展と展開を形成する上で、重要な要素になる。労働への衝動、節約しようという情熱、ある権力を持った人間の手段として人生を捧げやすくなっている状況、禁欲主義、強制的な義務感といったような、新しい人間特性に根ざした性質が、資本主義社会の新しい生産諸力になり、それなくして、近代における経済的社会的発展は起こりえなかった。まさにそれらの人間特性は、人間のエネルギーが形を変えて生み出した特殊形態であり、社会的過程における生産諸力の一つなのである。

・・・中略・・・

この原則を一般的言葉で表現すると以下のようになる。ある個人の生活様式全体を規定する社会過程、すなわち、その人が他人とそして労働と結びつく関係こそが、その人の人間特性を形成する。そして、新しいイデオロギーというのは、それが宗教的・哲学的・政治的なものであろうとも、その変化した人間特性の枠組から生じ、それを強化、充足させ、安定化させる。すなわち、新しく形態変形した人間特性は、その時代の経済発展をさらに

強化するように重要な要素になるのであり、その社会的発展過程に影響する。新しい人間特性は、起源的には、新しい経済諸力が生み出す脅威に対する反動として形成されるのであるが、徐々に、その新しい経済的進展を強化するための生産諸力になっていくのである⁵⁾。

すなわち、分析としては、プロテスタンティズム（ルターとカルヴァンの教義）が、中世的な宗教的・固定的結び付きを資本主義が突き崩してしまい、そのことで「脅かされ、覆され、孤独化した人びとの心の空隙、資本主義的世界という新しい現実に対して方向付けを与え、関係付ける意味」を機能的に担うようになったというわけである。

プロテスタンティズムをケーススタディにした人間特性の動的変動を、市場的社会構造と企業的社会構造といった細かい内容まで言及しているわけではないが、その全体構造としての構造的支配様式に適応的な人間特性が「社会的選択」され、今度は、その選択された人間特性が、人間主体によって形態維持効果を発揮する「社会的過程」を描いている。

共有された人間特性が社会的過程においてどういう機能を持つのかという観点で考察すると、私たちは個人にとってどういう機能を持っているのかという話から始めなければならない。すなわち、その個人が持っている条件に対して適応していくほど、その人はその共有された人間特性によって、（社会的過程から要求されて一坂本）しなければならないことを、（自分から進んで一坂本）したかったことのように感じさせられる効果を持つ。ある社会における大部分のひとが保持する人間特性が、その社会において遂行する仕事に適応的になれば、人びとのエネルギーは、その

5) Fromm, E. (1994). *ibid.*. pp.101-102. から引用。

社会を機能させるのに必要な生産諸力を形作るようになる。

・・・中略・・・

社会から要求される仕事に個々人の人間特性が動的に適應するほど、人びとのエネルギーは矛盾をきたすどころかその社会からの要求水準に適合するような動機付けされ、上手く機能するようなものとなる。すなわち、近代人は、できるだけ一所懸命に仕事をするように外的に強制されるのではなく、これまで私たちが心理学的な重要性として分析しようとしてきた、社会から要求される仕事に対する内的な強制として機能してしまうのである。

・・・中略・・・

言い換えれば、共有された人間特性というのは、社会システムから外的に要求されることを内面化していることをいうのであり、人間のエネルギーを先験的に与えられた経済的社会的システムが要求するタスクに適應するようにくりつけられている。

・・・中略・・・

先行する人間特性の諸構造は、新しい経済条件が出現した後でも、たとえその経済条件に適合的でなく、有効でない人間特性であったとしても、継続して残存する。個々人は自らの人間特性の諸構造に基づいて行動する傾向があり、旧来の人間特性に基づいていると、経済的利益の追求に関しては足枷になったり、旧来の人間特性に依拠してしまうと十分な意味のあるポジションを確保できるチャンスが十分ではなくなったりするのである⁶⁾。

ここでは個々の人間主体の意識レベルにおける共有された人間特性の相克が指摘されている。批判的实在論におけるテクニカルタムを使えば、ある主体は、自らが利用する社会構造を維持するために、その社会構造と自らの社会的人格特性を組み合わせ、形態維持のための

戦略的行動を展開する。

他方、別のある主体は形態変形的に戦略的行動を同じように展開し、その合成的結果として、構造的支配形態が形態変形しながら再生産されることが描かれている。

上記引用箇所社会存在論は、歴史上存在するすべての社会システムに適用された抽象水準の話である。では、Frommの執筆段階において、資本主義社会における企業という抽象水準で、「共有された人間特性」の影響をどのように評価しているだろうか。基本的にはFrommの主著 *Escape from Freedom* のChapter4が企業レベルの議論と関係する。いくつか場面を拾い出してみよう⁷⁾。

2.3.3 社会存在論の企業レベルへの適用

まずは、批判経営学の前提である個別資本運動がいわゆる最終審級で企業を規定しており、企業にかかわるすべての利害関係者は資本蓄積にどれだけ貢献するのかという点で評価されることを指摘している箇所を見てみよう。マルクス主義的な意味でいう「疎外」「物象化」状況の観点から個別資本運動を描いている⁸⁾。

7) なお、「共有された人間特性」理論の枠組は主著のAppendixとFromm, E. (1990). *Man from Himself: An Inquiry Into the Psychology of Ethics.*, Holt Paperbacks. が詳しい。なお、脚注6)の主著は1941年、この著作は1947年出版である。

8) マルクス主義的な社会分析としては伝統的にあるものである。Edward Thomsonの表現すれば、労働現場における時間的な規律が自然的なもの(task-orientation)から他律的なもの(time discipline)にかわるものである。Edward Thompson, *Time, Work-Discipline, and Industrial Capitalism. Past & Present*, No.38 (Dec.), 1967, pp.60-61., p.90.などを参照。Thomsonのいうtask-orientationというのは、資本主義以前の労働過程の状況であり、①自然の変化に合わせたもの、②労働と生活が未分化であること、③資本主義的な時間で区切られた労働よりも怠惰で不経済のように見えること、などを特徴とする。これに対して、資本主義化してしまうと、新しいtime disciplineが普及し、資本(家)によって他律的に時間管理がなされはじめるという。最近であれば、David Graeberが、トムソンに依拠しつつ、後者をBullshit Job (BSJ)と表現で、疎外状況を表現している。David Graeber, ↗

6) Fromm, E. (1994). *ibid.*. pp.281-282から引用。

資本主義においては、経済的活動や成功や物
資的利益それ自体が目的と化す。自分自身の
目的や魂の救済といったことではなく、経済
システムの成長にどれだけ貢献するのか、資
本蓄積をどれだけ行えるのが人間の運命を
決めることになる。人間は巨大な経済機構の
歯車になってしまったのであり、－たたくさ
んの資本を持つ者は重要な歯車であり、持っ
ていない者はそうではないという違いはあるが
－、常に人間それ自身の外側にある目的に奉
仕する歯車になってしまったのである⁹⁾。

なぜ個々人が経済的目的の手段になることに
服従するのかは、資本主義的生産様式の特殊
性に理由があり、その特殊性こそが資本蓄積
を経済活動の目的にするよう強制する。人は
利益創出のために労働するのであるが、その
創出された利益は消費されるためではなく、
新しい資本として投資されるためなのであ
る。すなわち、この増殖された資本が次の利
益を生み出すのであり、また再投資され、そ
れの循環がずっと続くことになる¹⁰⁾

経済的な関係だけでなく、人間同士の個人的
関係さえもまさに疎外された状況を呈するこ
とになる。人間関係がモノとモノとの物象的
関係としての特徴を帯びるわけである。しか
し、おそらく最も重要で最も破壊的な手段
性・疎外状況を呈するのは、個々人の自分自
身に対する関係である。個々人は単に商品を
売っているだけでなく、自分自身を売り、自

分自身をモノとしての商品だと感じてい
る¹¹⁾。

ここまでの記述は、市場的社会構造が商品関
係で成立することによって作動する個別資本運
動の規定性を指摘しているにすぎないが、では
次に、このような資本主義的生産様式の特殊性
によって生み出された資本蓄積運動が人間の心
理的側面にどのような影響を及ぼすのだろうか。
企業的社会構造と企業の利害関係者という
意味での人間主体にかかわる部分を引用してみ
よう。

大資本家であろうと小資本家であろうと、彼
らの生活全体が経済的機能、資本蓄積を果た
しきるところに注力されたわけであるが、資
本を持たず、労働力を売る以外どんな生活手
段を持たない人びとはどうなのだろうか。彼
らの経済的位置付けがもたらす心理学的な影
響は、資本家の場合とそれほど異なっている
わけではなかった。まず第1に、雇用される
ということは、彼らが市場法則に、景気変動
に、雇用者の手にある技術的革新の影響に依
存するということの意味した。彼らは直接的
に雇用者の操作対象なのであり、彼にとって
、雇用者は服従しなければならない権力者
の代理人なのである¹²⁾。

雇用主と雇用者ともに、相互に無関心という
精神で接し合う。employer というコトバ自
体が両者の人間関係の全体をふくんでいる。
すなわち、資本の所有者は、モノである機械
を「利用する」ように、他者をモノのように
「利用」する。両者ともにお互いを経済的利
害の追求のために「利用」する。両者は互い
の目的のための手段であり、利用するための

9) Bullshit Jobs: The Rise of Pointless Work, and What We Can Do About It., Penguin, 2019. ちなみに、Graeber は Bhaskar を起源とする批判的実在論の科学的立場に依拠していることも興味深い。
<https://www.theguardian.com/world/2014/dec/04/roy-bhaskar>

9) Fromm, E. (1994). *ibid.*. p.110. から引用。

10) Fromm, E. (1994). *ibid.*. p.111. から引用。

11) Fromm, E. (1994). *ibid.*. p.118. から引用

12) Fromm, E. (1994). *ibid.*. p.112. から引用。

「道具」となっている。相互にどれだけ手段として利用できるかという利害関係以外は全くない、人間同士の関係なのではないのである。この相互利用の仕組みは、まさに商人とその顧客との関係と全く同じである。

・・・中略・・・

作業労働者は自分の物理的なエネルギーを売る。これに対して、ビジネスマン、医者、事務労働者などは自らの「人間特性」を売る。彼らは自分の商品としての生産物やサービスを売るために、ある種の「人間特性」保持しておかなくてはならない。この人間特性は人を喜ばせるものでなければならないが、それにくわえて、数多くの他の要件も満たさなければならない。すなわち、その個人が占める地位が必要とされているエネルギーやリーダーシップやその他、多くのものを持っているなければならない¹³⁾。

「共有された人間特性」の比重に関する議論も Fromm がもうすでに行っている。

力という言葉は二重の意味を持つ。一つは、ある誰か他者に対する権力を保持しているという意味であり、その人を支配できることをいう。これに対して、もう一つは、あることを実際にある結果をうみだすことができるような能力を保持していることをいう。後者の意味は前者の支配とは何ら関係を持たず、あることをなすことに長けている、熟達していることをいう¹⁴⁾。

・・・中略・・・

サディズム的及びマゾヒズム的特性というのはある程度、すべての人に関して見受けられるものである。ある極の方を想定すれば、サドのマゾ的特性に完全に支配されている人びとがあり、もう一方の極に、全くそうでない

人が想定できるわけであるが、前者のパターンであるときのみ、サド的マゾ的特性だと表現しうる。すなわち、「人間特性」という表現を使う時は、フロイトが使っているのと同じ意味で、上記のような動態的な意味をふくませて、人間特性という表現を使う。このような意味で、人間特性とは、そのある人物に関する特徴的な行動パターン全体を表現するものではなくて、ある行動を引き起こすような優勢となっている特性のことをいっている¹⁵⁾。

要するに、「人間特性」は複数が個人個人の中にあり、それらが絡み合いつつも、当該の時空的条件に対して適応的などれかが優勢に出てくるのであり、それを character と表現しているのである¹⁶⁾。

批判的実在論的な表現を使えば、各人間特性はその人が持っている「構造」であり、それぞれが「潜在力」として、それらは各個人の中で一定の「傾向性」を持って「作用する力」として作用しあい、結果的にある時点における優勢な人間特性が「現実化した力」として表出する。なお、ナチズムがドイツで受け入れられたプロセスを説明する時に作用したのが「権威主義的人間特性」だという。

2.3.4 理論的枠組の適用事例；メキシコ農村の変容過程

これまで、Fromm の 1941 年の主著と 1947 年の「共有化された人間特性」理論の枠組を振り返ってみてきたが、ここでは、1970 年の Fromm と Maccoby の共著である *Social Character in a Mexican Village*¹⁷⁾ を少し詳しく見て

15) Fromm, E. (1994). *ibid.*. p.161. から引用。

16) 冒頭に再掲した図 1 を参照して欲しい。

17) Fromm, E. (2017). *Social Character in a Mexican Village*; With a new introduction by Michael Maccoby. Routledge. を利用した。元々は 1970 年に出版されており、1996 年に Transaction Publisher から、2017 年に Routledge から再出版されている。なお、1996 年の Transaction Publisher にメキシコでの研究協力者であった Maccoby によ

13) Fromm, E. (1994). *ibid.*. p.118-119. から引用。

14) Fromm, E. (1994). *ibid.*. p.160. から引用。

みたい。

拙稿（坂本, 2022a, 2022b）ではあくまで理論的枠組における、特に社会存在論に関する議論が中心であったが、その枠組を、近代化の波の中でメキシコ農村の社会経済的諸条件の変化とその構成メンバー（小作農）の「社会的人格特性（心的態度）」の変動を通じて、それら両者の相互関係がどう具体的に変容していくのか、を「共有化された人間特性」理論の応用的適用事例として位置づけられる¹⁸⁾。

Maccoby 自身が Fromm と共著で書いている枠組みでもあり、Maccoby 自身のその後の理論的展開の原型が端的に表れていると考えられ、本論文の今後の展開の理解にも資するといえる¹⁹⁾。

そもそも 1970 年出版のこの本は、伝統的なメキシコの農奴社会が市場経済に適応する 1960 年代のプロセスを経済的要素だけでなく、人間主体の要素を組み込むこと、その進化プロセスを描くことなどが主眼であり、Fromm の執筆意図としては、精神分析理論が個人レベルでなく、集団レベルにも応用可能であること、*Escape from Freedom* で構築した「社会的人格特性理論」をテストすること、社会的人格特性理論こそが、経済的・社会的・心理学的「諸要素の関係」を説明してくれる理論的枠組みであることを示すことにあった²⁰⁾。

1941 年の主著執筆時よりも、1970 年段階では社会的人格特性理論は彫琢されており、広い意味では新フロイト派の範疇ではあるが、Harry Sullivan, Karen Horney, Margaret Mead らの文化主義者（文化決定論）より、社会経済

的要因をより重視している²¹⁾。

Fromm に言わせれば、フロイトのリビドー理論は 19 世紀の物理学的な世界観・社会存在論を前提に構築されているのに対して²²⁾、社会的人格特性理論は、進化生物学的観点から「適応」や「社会的選択」といった社会的存在論を前提²³⁾にしつつ、社会的人格特性という概念は構築されている。性格とは、「人間の生存のためのエネルギーが、その主体の社会化の過程で構造化されるときに利用される一定の継続したやり方」²⁴⁾のことである。

Fromm によれば、社会的人格特性とは社会を成り立たせる接着剤のようなものであるという。人間は自らの環境に対して、ある一定のやり方で適応する。そのやり方とは、ある特定の社会が機能しつづける上で、人間が必要とするものを欲するというものである。この意味でいえば、感情の心理的に不安定な人は社会的人格特性を発展させることに失敗し、彼等の感情・心理は、適応的行動を支えない。もしくは、その種の人の社会的人格特性は環境と対立してしまう。その種の感情的特質はもう消えてしまう状況に適応的だからである。その種の状況では、社会的人格特性は接着剤ではなく、むしろダイナマイトになってしまう²⁵⁾。

多くの人格的特質は一つのシステムの部分が構成している。システム全体が変化する限り

ㄨ って Introduction が書かれており、Fromm の社会的人格特性理論の学説史的位置付けがまとめられている。

18) Fromm, E. (2017). *ibid.* p.ix., p.1, p.226. など を参照。

19) 本稿では、まずは Fromm の社会性格理論の枠組を批判的に吟味することが主眼であり、Maccoby がその枠組を学説史的にどのように受け継いでいくのかは、次稿で指摘していく。

20) Fromm, E. (2017). *ibid.* pp.iv-v. を参照。

21) Fromm, E. (2017). *ibid.* pp. x vii-xviii. を参照。

22) Fromm, E. (2017). *ibid.* p. x. を参照。

23) Fromm や Maccoby らにとっての「人間の進歩 (progress)」とは「経済学的 (物的生産力), 生態学的 (環境の質), 人類学的 (人間の発展) 観点から評価されるべき」ものであり、「人間の発展 (development)」とは「人間のニーズの構成とその充足可能性の拡大」と考えられている。

Fromm, E. (2017). *ibid.* p. x xviii. を参照。

24) Fromm, E. (2017). *ibid.* p. x. から引用。

25) Fromm, E. (2017). *ibid.* p. x xviii から引用。

においてのみ、部分の人格特性も変化する。部分は独立して変化するのではない。全体としてのシステムは部分間の関係全体と呼応して形成されるが、その呼応はランダムに任意になされるのではなく、人間固有のやり方によって条件付けられている。人間が持つ生命エネルギーが実際に「流れ」を形成するやり方を決めるのがその呼応である。人格的特質の全体システムは相対的に安定的な様式を持ち、人間主体が自然を獲得し、他者との関係を構築するときに人間が持つエネルギーが構造化されている²⁶⁾。

この種の社会的人格特性に関する動態的把握は、Freudのような機械論的神経論的解釈ではなくて、社会進化論的存在論を考慮するときに、よりはっきりと理解できる。人間はその他の動物より、本能という側面が弱い。人間は他の動物同様、行動し意思決定するが、他と違って、それらの決定を本能とつかって、自動的に行うのではない。本能が意思決定を決定づけるわけではないからである。社会的人格特性の特性こそが他の動物の本能に当たる部分を代替している²⁷⁾。

個人はやりたいことをやりたいが、社会が第二の自然として、制約的に機能する。社会はツールだけでなく、それを機能させる社会的人格特性としてのパーソナリティのあるタイプを選択的に選ばせる条件を創り出す。社会的人格特性を通じて、社会的環境に適応的なパーソナリティを選択させる²⁸⁾。

人間以外の動物の「本能」に相当するものが「社会的人格特性」だと考えられており、人間

が自然的・社会的環境に適応するときの接着剤のような役割であるという。ある人間主体は、当該社会の生産様式に適応的な社会的人格特性を活用し、別の人間主体は適応的ではない。その相剋こそが「社会的選択」過程である。

いわば、批判的实在論でいう社会構造としての「社会的環境」に、適応的な人格特性が社会的成員に適応的に選択されて、社会構造も生成・再生産されていく。ある主体の社会的人格特性は適応して形態変形していき、過去の別の社会的人格特性は、生成していく社会構造には適応的でなくなり、廃れていく²⁹⁾。まさに、批判的实在論でいう社会構造と人間主体との存在論的位置関係を社会的人格特性を介して表現していると言える箇所である。

Freudの用語は使うが、それは性的本能のを介した世界との関係を表現したものと捉えるのではなく、人間の生活過程における世界との関係性を表すと解釈する。このことでエネルギーというもに関する解釈が変更されることになる。フロイトはエネルギーを性的エネルギーと捉える（リビドー）。Fromm以後は生存のためのエネルギーと捉える³⁰⁾。

社会的人格特性という概念はFreudの人格特性分析を基礎にしているが、人格特性の構造には、集団レベルで共通する社会的人格特性構造があり、それをFrommは社会的人格特性と概念化した。社会的人格特性概念は固定的で、個人的なレベルのものではなく、社会集団が直面する経済的・社会的、文化的な共通の諸条件に対する適応結果として人格特性マトリックス・人格特性の塊として表出する³¹⁾。

29) Fromm, E. (2017). *ibid.* p.19. を参照。

30) Fromm, E. (2017). *ibid.* p.15. から引用。なお、フロイトのリビドー概念を刷新したユングのリビドー概念と同じであるという。

31) Fromm, E. (2017). *ibid.* p.16. から引用。

26) Fromm, E. (2017). *ibid.* p.11. から引用。

27) Fromm, E. (2017). *ibid.* p.12. から引用。

28) Fromm, E. (2017). *ibid.* p.18. から引用。

自由からの逃走は、WWW1の後の下級中間層の社会的人格特性分析の応用例。マトリックスを儉約型、嫌悪型、サディスティック型だと分析し、下級中間層の社会過程における没落が、このマトリックスを生み出し、ヒトラーはそれらの階級を糾合することでナチズムのの基板になったと議論した。

社会的人格特性理論は、精神的エネルギー一般を現実的に、当該の社会が機能するために必要とする人間特性を具体化する、現実化する、特定の形態に変化させる様式を説明する。すなわち、社会一般というものは存在せず、常にある特定の社会構造に適応する形で社会的人格特性が形成される。それぞれの社会ないし階級はその社会を機能させるべく、特定の機能を要求することになる³²⁾。

社会的人格特性理論の学説的位置付けも、Freud, Fromm, Maccoby の位置関係が明示されている。Fromm は社会的人格特性を、受容・受動的 (Receptive), 個人努力的 (Hoarding), 目的達成優先的 (Exploitative), 市場評価重視的 (Marketing) 社会的人格特性³³⁾の4つに類型化しているが、前の3つは Freud の Oral, Obsessive, Narcissistic の類型 (だけ) を引き継いで、表現を変えている。最後の市場価値重視型だけが Fromm が追加した類型である³⁴⁾。Fromm に言わせれば、西洋における市

場の産業社会の生産様式としての特質への適応こそが市場評価重視型社会的人格特性を生み出すという。

では、メキシコ農村社会の構造的変容過程から得られた4つの社会的生活の類型について少し詳しくみてみたい。

本稿のはじめの図1の箇所でも指摘したが、「社会的人格特性」理論では、フロイト的な物学的・機械論的な社会存在論ではなく、環境と言っても、物的環境だけでなく、社会的環境³⁵⁾との相互作用をも社会存在として重視している。いわば、社会生物学的³⁶⁾、人類学的観点³⁷⁾

35) 両者をあわせて、Ecostructure と呼ばれる。Stephen Sanderson, *The Evolution of Human Sociality: A Darwinian Conflict Perspective*, Rawan & Littelfield Publisher, 2001, pp.150-151. や *Studying Societies and Cultures: Marvin Harris's Cultural Materialism and Its Legacy*, Paradim Publishers, 2007, pp.217-218. などを参照してほしい。

36) 社会生物学の視点も組み込んだ社会学理論 (Darwinian Conflict Theory/Evolutionary Materialism) を提起している Stephen Sanderson などが典型的な議論である。ちなみに、Sanderson の DCT/EM は社会生物学、マルクス派とウェーバー派の闘争理論、文化唯物論、合理的選択理論を融合した枠組みである。Stephen Sanderson, *The Evolution of Human Sociality: A Darwinian Conflict Perspective*, Rawan & Littelfield Publisher, 2001, p.143. を参照。また、最近の著作であれば、*Race and Evolution: The Causes and Consequences of Race Differences*, Mount Lebanon Editions, 2022, pp.127-130. あたりでも二つの環境への適応から人種と社会現象を議論している。進化論的社会学や人類学の観点では、人間社会における事象を説明する際の社会存在論として、二つの環境での再生産という進化論の視点を入れることはごく普通の観点である。Stephen Sanderson, *Human nature and the Evolution of Society*, Westview Press, 2014, p.41. も参照。エマニュエル・トッドの人類学に関する一連の著作の独自性は、いわゆる生産様式だけでなく、再生産様式も、社会システムの比較分析の中軸にしている点にある。エマニュエル・トッド『世界の多様性〈普及版〉[家族構造と近代性]』藤原書店、2025年、同『我々はどこから来て、今どこにいるのか? 上 アングロサクソンがなぜ覇権を握ったか』藤原書店、2022年、同『我々はどこから来て、今どこにいるのか? 下 民主主義の野蛮な起源』藤原書店、2022年、ノ

32) Fromm, E. (2017). *ibid.* p.17. から引用。

33) 前稿でも指摘したとおりである。Fromm, E. (1990). *op.cit.* p.62-69, pp.79-81. を参照。ただし、本稿では精神分析学で伝統的に訳されている訳語ではなく、Maccoby の視点を筆者 (坂本) なりに解釈して、訳語は前稿とは違うものに再設定した。

34) Fromm, E. (2017). *ibid.* p. x x ii 参照。Maccoby によると、*Gamesman* (1976) や *Why Work?* (1988) 等は Fromm が *Escape from Freedom* で展開したような社会的人格特性理論の社会文化的・精神分析学的展開を、Maccoby が引き継いでアメリカ企業社会に適用したものであるとしている。

からの社会存在論を前提にしている。

メキシコ農村の構成メンバーたちの分析を通じて、まず、「受容・受動的 (Receptive)」「略奪的 (Exploitative)」「儉約的 (Hoarding)」人格特性を抽出している³⁸⁾。

受容・受動的人格特性 (Receptive Orientation) とは、すべての出来事 (物的なものであれ、愛情・知識・喜びといった精神的なものであれ) は自分の外部にあり、その外部に存在するものを受け入れ、享受するほかないと考える傾向のことをいう。

次に、略奪的人格特性 (Exploitative Orientation) は、受容的人格特性と、物事は外部にあるという点で共通しているが、この人格特性は受動的な態度とは逆で、力を使って獲得する傾向をいう。

3つ目の儉約的人格特性 (Hoarding Orientation) とは、外部から何かを得られる可能性を考えておらず、今存在する獲得しているものを節約・儉約する特性であり、現在の物事 (ものであれ記憶であれ知識であれ) に対する忠誠・貞節・愛着を示すことがあるという。

一人の人格は、これらの諸人格特性がブレンドされた形で内在し、相互に影響し、一定程度の親和性を持ちつつ、一つの人格を形成してい

ると考えられる。

この三つの人格特性の合成という次元に、生産的／非生産的 (productive/non-productive) 人格特性という次元が重ね合わされる。一定の歴史的な社会存在条件が与えられたとき、いわば、物的・社会的環境に人間が適応する際に、ある時空的条件ではこれこれの人格特性は生産的なものとして機能し、また別の条件ではこれこれの別の人格特性が非生産的に機能することになる。

ここでいう「生産的であること (Productiveness)」とは、Fromm (とこの段階の Maccoby) によれば、「人間が、他の誰かに左右されることなく、自らの意思で、自らの能力を使いこなすことであり、自分の中にある素質として能力・可能性を自覚し、他の何か (偶像化された対象物・人・制度) に対象化されるのではなく、それら能力の体现者として現実化させること」³⁹⁾を意味している。

また、別の用語に置き換えるとすれば、「生産的」は *activeness* (積極性) であり、「非生産的」は *passivity* (受動性) であるという。前者は「自らの力・エネルギーを使って、現状に変化を起こさせる活動」のことであり、後者は「現状を変革できず、外部の力によって影響される状態」をいう⁴⁰⁾。

そして、どの程度の「強制度」「自由度」の範囲を考える上で、共依存型⁴¹⁾ (symbiotic re-

ㄨ どをがその典型的な著作である。

37) Herman Pontzer, *Burn: New Research Blows the Lid Off How We Really Burn Calories, Lose Weight, and Stay Healthy*, Avery, 2021, Chapter 4 を参照。類人猿と違って、ヒトという種が種として自律したのは、物的環境条件だけでなく、「分け合う」という社会的環境条件を変えたことが進化的に重要な契機であったことを指摘している。食料のわけあう行動特性によって、社会的剰余が生み出されて、それが脳への配分できる消費カロリーを増大させ、脳の容量自体が類人猿よりも増大する。それが、さらなる社会環境の変化を生み出し、大型動物の狩りをする上での多くの技術革新を生み出す。物的環境と社会環境という二つの環境への適応する相互作用という観点＝進化論的枠組・社会存在論が重要であることを示唆している。Stephen Sanderson, *Human nature and the Evolution of Society*, Westview Press, 2014, p.19. も参照。

38) Fromm, E. (2017). *ibid.* pp.69-73. を参照。

39) Fromm, E. (2017). *ibid.* p.71. から引用。ほぼ同様の記述は、Fromm, E. (1990). *op.cit.* p.84. にもある。いわゆる、マルクス主義的な意味での「疎外」状況にないことがイメージされているとあって良いだろう。

40) Fromm, E. (2017). *ibid.* pp.72-73. と脚注 7) を参照。比喩的な意味で、「催眠状態の人物」があげられている。深い催眠状態の人は、普通に積極的に活動しているが、自分の意思を自分でコントロールできているわけではないようであるから、生産的な状態ではないとされている。すなわち、自分の意思を外部にコントロールされていない状態が判断基準になっている。

41) 直訳的には「共生型」であるが、日本語の語感としては、マイナスイメージが少ないので、「共依存」という訳語を選択した。

lated ness), 離脱／破壊型 (withdrawal-destructiveness), ナルシシズム型 (narcissism), 愛情型 (love) の四通りの物的・社会的環境との「関係様式 (relatedness)」が想定されている。

共依存型は相手に依存する (swallowed/masochism) パターンと相手を依存させる (swallowing/sadism) パターンに細分化され、逆に分離度合いを基準に、離脱は他者との関係の無関心状況に相当し、破壊は離脱の究極的形態であり、外部のものの自体を消滅させることを意味する。

最後のナルシシズム型も離脱の一形態であり、フロイトの発見の中で最も重要な形態であるという。Maccoby のその後の一連の著作⁴²⁾でも肯定的な人格特性として位置付けられているが、Fromm においても非生産的人格特性の一つであるが、「一般的」「成熟した」人間は、このナルシシズム人格のマイナス面を消滅させることはないが、最小化できていることがほとんどだとし、比較的肯定的に位置づけられている⁴³⁾。

42) Fromm の「生産性」に関する議論を基盤に、Maccoby はその後の彼自身の著作で、Fromm 独自のマーケティング人格に加えて、「ナルシシスト人格」を発展させている。特に、Michael Maccoby, *Narcissistic Leaders: Who Succeeds and Who Fails*, Harvard Business School Press, 2007, pp.84-86. などが詳しいが、Maccoby 独自の展開は次稿以降で批判的に吟味するため、ここでは詳説しない。また、Maccoby のこの著作は 2003 年に出版されているが、2003 年版が入手不可能であったため 2007 年の版を参照した。

43) Fromm の生産性に関するこのあたりの扱い方を、Maccoby は引継ぎ、自らの人格特性理論を展開している。Fromm によるナルシシズム人格に関する詳しい理論の説明は Fromm, E. (1964)., *The Heart of Man: Its Genius for Good and Evil*, Routledge & Kegan Paul の Chapter 4 を参照。また Chapter 6 においてはナルシシズムが良い意味で作用する時と悪い意味で作用する時とを類別して議論がなされている。本稿で議論した生産性と非生産性の分類と同じものであるといえる。

すべての人類は、生き残るためには、(物的環境という意味では－坂本) 他者からモノを受けとったり (accept), モノを取ったり (take), 蓄積／節約し (save), 交換 (exchange) しなければならないし、(社会的環境という意味では－坂本) 権威を受け入れ、他者を指導・管理し、孤独になったり、自信を持って行動しなければならない時もある。

【・・・中略・・・】

社会的関係は、容易に生産的側面が非生産的側面に転化することはあり、どの程度出てくるのかは、社会的人格特性全体における生産的側面が占める程度によって決まってくる⁴⁴⁾。

あれかこれかといった 2 項対立的なものではなく、それぞれの人格特性は生産性の程度によって制約される連続体のある点でそうであるにすぎない。

以上のことを前提に、近代化が起きる黎明期のメキシコ農村の農民らの人格特性分析を行っている。

まず、男女別の支配的な第一人格特性、第二人格特性を類型化し、「関係」に関するタイプ化とそれが政治的傾向にどのように反映するのかを分析している⁴⁵⁾。

結論的には、最頻出する傾向にある非生産的受動的人格特性、生産的儉約的人格特性、両義的な略奪的人格特性という 3 つの特徴的な類型が析出できるという⁴⁶⁾。

非生産的受動的人格特性は、封建制度の最後の段階としてのメキシコ農村であることから出てくる特徴的な人格特性であり、アステカ文明の時に形成された封建制度を起源とするものである。スペインの征服後も、修正された封建制度として引き継がれていた。

44) Fromm, E. (2017). *ibid.* p.78. から引用。

45) 下記の三つの表は、Fromm, E. (2017). *ibid.* p.87., p.89., p.90. から引用。

46) Fromm, E. (2017). *ibid.* p.109. を参照。

TABLE 5:1 The Mode of Assimilation (N=406)
(Percent scored)

<i>Dominant Mode</i>	<i>Male</i>	<i>Female</i>	<i>Total</i>
Dominant receptive	52	36	44
Dominant exploitative	13	9	11
Dominant hoarding	22	39	31
Dominant marketing	0	0	0
No mode dominant	13	16	14
	100	100	100

Dominant or Secondary

Receptive	79	62	71
Exploitative	26	26	26
Hoarding	46	65	55
Marketing**	6	4	5
	157	157	157*

*Total greater than 100 percent because each individual may be scored as expressing either one or two modes of assimilation.

**Although we decided not to include the marketing orientation in the analysis of the results, the percentage scored for marketing is included in the tables in order to make them complete.

TABLE 5:4 The Mode of Relation (N=406)
(Percent Scored)

<i>Dominant Mode</i>	<i>Male</i>	<i>Female</i>	<i>Total</i>
Dominant sadism	7	5	6
Dominant masochism	4	20	12
Dominant destructiveness	2	8	5
Dominant narcissism I	40	26	33
Dominant narcissism II	9	5	7
Dominant indulgent love	7	4	6
Dominant conditional love	29	31	30
Dominant love	1	1	1
	99	100	100

Dominant or Secondary

Sadism	30	23	26
Masochism	18	40	29
Destructiveness	21	27	24
Narcissism I	67	45	55
Narcissism II	15	12	13
Indulgent love	32	19	25
Conditional love	55	63	60
Love	13	13	13
	251	242	244*

*Total greater than 100 percent because each individual may be scored expressing one, two, or three modes of relation.

**TABLE 5:5 The Mode of Sociopolitical Relations (N=406)
(Percent Scored)**

<i>Dominant Mode</i>	<i>Male</i>	<i>Female</i>	<i>Total</i>
Dominant authoritarian	17	15	16
Dominant traditional authority	24	16	20
Dominant submissive	45	55	49
Dominant rebellious (active)	3	8	6
Dominant rebellious (passive)	1	1	1
Dominant democratic	9	5	7
Dominant revolutionary	0	0	0
	<u>99</u>	<u>100</u>	<u>99</u>
<i>Dominant or Secondary</i>			
Authoritarian	29	28	28
Traditional authority	64	49	57
Submissive	77	81	79
Rebellious (active)	31	45	38
Rebellious (passive)	8	20	14
Democratic	46	30	38
Revolutionary	1	0	1
	<u>256</u>	<u>253</u>	<u>255*</u>

*Total greater than 100 percent because each individual may be scored as expressing one, two, or three modes of sociopolitical relations.

当時の半封建制度下の農奴 (peon) には、自らの地位を変えることはできず、領主への完全な依存状態であったから、地位を変更しようといういかなる考えも起きなかったといえる。このような状況では、受動的人格特性が当然、第一人格特性になり、結果的に家父長的制度 (父親ないし母親への心理的な依存性が強い) がその人格特性を補強・補完することになる⁴⁷⁾。

これに対して、生産的倹約的人格特性が少ない割合 (30%) でいる。これは、独立自営農民が典型的にもつ人格特性である。市場や不作への備えが要求されることから、倹約的人格特性を獲得することにつながる⁴⁸⁾。

最後の 25% 程度が略奪的人格特性であり、生産的な傾向と非生産的な傾向の二つの系統があるという⁴⁹⁾。特に、前者は資本主義的な独立

自営業者などであるという。

2.3.5 小括：Maccoby との接点

フロイト左派 Fromm の分析枠組みを、Maccoby の人格特性理論の原点という意味で、少し詳しく見てきた。

まず、方法論としては、精神分析学を個人レベルで終わらせるのではなく、社会集団レベルにも適用可能な枠組を提供しているといえ、このことは、新しい状況に対する新しい適応可能性を予測可能にさせる貢献をしている⁵⁰⁾。この点は、かなり修正された形態で、その後の Maccoby の著作にも引き継がれている⁵¹⁾。

次に、社会的人格特性理論は、社会存在論としては、進化生物学を参考に、物的環境・社会

47) Fromm, E. (2017). *ibid.*. p.110., p.115. など参照。

48) Fromm, E. (2017). *ibid.*. p.117., pp.119-120. など参照。

49) Fromm, E. (2017). *ibid.*. pp.122-123. など参照。

50) Fromm, E. (2017). *ibid.*. p.226. を参照。

51) 質問事項の数値化で複数の人格特性の割合から、第一人格と第二人格を特定するなどの方法は、Maccoby のその後の著作では、4つの人格タイプに分類されて引き継がれている。Michael Maccoby, *Narcissistic Leaders: Who Succeeds and Who Fails*, Harvard Business School Press, 2007, pp.26-34. などは Fromm が行ったやり方を Maccoby がアレンジしたものであることがわかる。

的環境という二つの環境へ人間が適応する結果として、複数の人格特性が構造化され、全体として社会的な人格特性が把握され则认为られている。この社会存在論に関しては、Maccobyのその後の著作で、Frommほど多くを割いて論述されているわけではないが、2007年の著作⁵²⁾でも、わざわざFrommの1947年の著作⁵³⁾の社会存在論の箇所を引用していることから、引き継がれていることが端的にわかる。

最後に、具体的な社会的な人格特性として、メキシコ農村にケーススタディとしては、生産的・儉約的人格特性、非生産的・受動的な人格特性、生産的・略奪的人格特性という3つの人格特性が把握され、それぞれ独立自営農民、日雇い小作農、資本主義的企業家が典型的な人々であった。社会経済的条件を向上させるのかそれとも低下させるのかによって、生産的か非生産的かが分かれ、その相剋・相互関係を通じて、全体としての人格特性が決まると考えられた⁵⁴⁾。

このような複数の人格特性のうち、ある特性は生産的となり、ある特性は非生産的となる。これを自然選択からの派生として、「社会選択」という表現を使っている。もちろん、いわゆる「社会ダーウィニズム論」的な適者生存という意味で使われているのではなく、一定の安定的な環境条件において、支配的な適応的な特性と非適応的な特性が常に並存する。しかし、移行

期の社会になると、支配的な人格特性が非適応的になり、異端的・逸脱的な特性が新しい環境では適応的となる。逸脱的だった人格特性が新しい条件を生み出し、その他の社会条件を変更していき、次世代には支配的な人間特性となるという意味である。社会的な人格特性全体が選択的要素であり、一定集団のある部分には適応的になり、別の集団には非適応的になる。一定の集団が必ず適応的になるという意味ではなく、ある条件下では適応的だったことが次の条件では足枷になり、その逆も起こるという弁証法的な社会変動を意味する⁵⁵⁾。

Maccobyの著作 *Gamesman* における「生産的ゲームズマン」というのは、ここでいうFrommの進化生物学的・弁証法的な社会的な人格特性の変動ロジックを適用したものであるといえる。

すなわち、19世紀においては、小規模個人企業レベルの企業家にとって適応的な人格特性（儉約的・トップダウン的）は、20世紀のような大規模経営者企業になると非適応的となり（非生産的）、柔軟にチームを動かせるような、人生を競争的なゲームのように捉えられる人格特性（Creative Gamesman）が適応的となるという枠組であった。

【未完】

（受理 2026年1月4日）

52) Michael Maccoby, *Narcissistic Leaders: Who Succeeds and Who Fails*, Harvard Business School Press, 2007, p.83. を参照。

53) Fromm, E. *Man from Himself: An Inquiry Into the Psychology of Ethics.*, Holt Paperbacks., 1990, の再版を参照したが、この著作は元々は1947年出版である。

54) Fromm, E. (2017). *op.cit.* pp.230-231, p.234.などを参照。近代における典型例としては、17, 18世紀のヨーロッパ・北米においては、生産的な強迫的・儉約的（プロテスタント的な）人格特性が黎明期の資本主義的な条件には適応的な人格特性であった。、

55) Fromm, E. (2017). *ibid.* p.232., p.234.などを参照。